

第161回山口西田読書会（2018年1月27日）
前回（2018年1月20日）のprotocols 担当田中克典
テキスト 西田幾多郎『自覚における直観と反省』

1. これまでの読書会の経過（佐野先生）

善の研究 純粹経験からすべての実在を説明する

自覚における直観と反省 『自覚』からすべての実在を説明する

2. 跋 第7段落（342ページ3行目～第9段落（346ページ2行目）を読み進めた

第7段落

絶対自由の意志の世界（直接の実在＝知識の対象として反省できない、認識の根底として認めねばならないもの＝カントの物自体）→種々の対象界が如何にして出てくるのか

我々の内省的経験（直観）から、以下のことがわかる

⇒『我々の意志→その一が自由かつ一大自由の中に包摂』

『我々の自己→一瞬一瞬に自由かつ全体において自由』

我々の自己→目的の王国（カント）概念（ヘーゲル）

それぞれの自由を認めながらかつ否定しながら全体の調和を認める

一一の作用の中に肯定とともに否定を含む

自由⇒肯定の中に否定、否定の中に肯定

意志⇒一一が独立自由、すべて絶対自由の意志の立場に包摂

絶対意志の否定の立場（反省）→すべてを統一してみることできる

我々の経験全体

→絶対意志の否定的統一（反省）の対象界としてみることできる

↓（上記の見方でできたもの）

実在界←思惟の統一、すなわち思惟の範疇への当てはめによってできたもの

実在界⇒各自独立自由なる我々の個人的自己を認めながら、超個人的意識の立場（絶対自由の意志）から全経験を統一（否定し反省）してみたもの

思惟とはなにか

絶対意志の否定の立場 絶対意志の一作用

→絶対意志の否定作用（反省）として独立に考えた時→それ自体が一つの対象界を持つ→数理の世界＝純粹思惟の対象界

思惟→そのままではダメ→己自身を完成→全人格（全経験）の統一→実在界
リッケルト 直接経験→所与の範疇に当てはめ

→時間空間因果の範疇に当てはめ→実在界

⇒物理学的世界→物理的世界の統一（ブランク）

一つの立場に立ったままでは、

→その立場自身を反省できない

→その対象界＝動かしがたい実在界と考えるてしまう

絶対自由の意志そのものの立場（アプリアリのアプリアリ、作用の作用）

→思惟そのものを対象として反省できる

*ア・プリアリ（経験に先立って成立しているもの）

歴史の世界→実在界を原経験の形に再び構成してみたもの
自然科学→一般化的方向
歴史→個性化的方向（個を扱う、個を理解する）→自然科学の転倒

歴史的世界

歴史学の世界 心理学の世界 生物学の世界 化学の世界 物理学の世界

物理的世界

意志そのものの具体的経験に近づく→目的論的

各種世界の接合点→現在の『我』

→これを通じてすべての世界に出入りできる

『我』⇒『我が我に働くこと』（フィヒテ第一の第2段落）

⇒絶対意志の一作用としての思惟

第8段落

絶対意志（否定を否定して何の立場においても独立自由なることができる
＝直観の世界）

→さらに実在界を超越

→それ以外の種々の世界（芸術、宗教の世界）を有することができる

⇒無限なる可能の世界、想像の世界の展望が開かれる

→夢のごとき空想も一一事実

絶対意志の立場に対する直接の対象界

⇒自由意志の世界（すべての物が一一独立の作用）

自由意志の世界→時間も空間も因果もない→萬物はすべて象徴

自然界（我々が唯一の実在界と考える）→一種の象徴

c f ボードレール『人と海』

第9段落

まとめ

絶対意志（如何にしても反省できない、対象化することができない）の直接の対象

＝第一次的世界＝芸術の世界、宗教の世界

→一一の現象が象徴（時間も空間も因果もない）＝自由の人格

我々の思惟→唯一の作用にすぎない

思惟の上に立つ世界

→ただ一種の真理、ただ一種の世界≠唯一の真理、唯一の世界

∴) 思惟＝絶対意志の一作用にすぎない

思惟の立場→数理の世界

数→純粹思惟の世界の実在

数理→意志の直接の対象→一種の象徴（音楽の世界での一音符と同じ）

絶対意志の統一→深さと広さ

一一の立場

→深く純なる方向、人格の一作用としてその全体の統一に向かって進む

→知識の客観性の要求 超個人的意識の立場（343ページ1行目参照）

3. 哲学的問い

芸術の世界、宗教の世界が、如何にしても反省することができないものだとすれば、そこに発展の可能性はあるのか？